

令和 5 年 6 月 12 日現在

機関番号：82621

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2022

課題番号：19K00238

研究課題名（和文）日本を中心としたアジア諸国の現代美術と美術理論に関する総合研究

研究課題名（英文）History and Theory of Contemporary Art in Japan and other Asian countries

研究代表者

米田 尚輝（Yoneda, Naoki）

独立行政法人国立美術館東京国立近代美術館・企画課・主任研究員

研究者番号：50601019

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、日本の現代美術において美術と親和性が低いものとして考えられ、看過されがちであった文学という芸術ジャンルを考察した。言語芸術によっていかに視覚芸術を描写するかが問題となるが、言語芸術は、視覚芸術を心的イメージとしてしか表象することはできない。それと同時に言語芸術と視覚芸術という二項は、少なくともイメージという共通項で結ばれているのである。本研究は次に、「もの派」を代表する韓国人の美術家、李禹煥に照準を定めた。李は1960年代後半から70年代前半にかけて、自然や人工の素材を節制の姿勢で組み合わせ提示する「もの派」を牽引した。本研究では李の彫刻シリーズ「関係項」の展開と特徴を検証した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、日本ならびにアジア諸国の現代美術の理論と歴史を考察するものであった。研究成果は、主に下記の二つの仕事に大別される。一つは、日本の現代美術家における作品群を「文学」という視点から考察し、イメージとオブジェクトに内包される物語性を検証した。結果として、多様化する現代美術の表現形式をさらに細分化することが可能となった。もう一つは、韓国の美術家、李禹煥の仕事を検証することであった。1960年代後半の「もの派」時代から今日までの彫刻シリーズ「関係項」の展開を考察することで、そこに通底する李の芸術原理を明確化することができた。

研究成果の概要（英文）：The research focused on the genre of literature, which has conventionally been thought to have little affinity with contemporary art in Japan. The issue of how to express visual art by means of language arises, but language can only represent visual art as a mental image. At the same time, the two poles of this duality (linguistic and visual art) are at least connected by the common term of the image. Then, the research focused on Lee Ufan, a Korean contemporary artist who was a prominent member of the Japan-based Mono-ha group. In the late '60s and early '70s, Lee spearheaded Mono-ha (lit. "School of Things") by combining natural and artificial materials in a temperate manner. The research examined the development and characteristics of Lee Ufan's sculpture series "Relatum."

研究分野：美術史、現代美術、表象文化論

キーワード：美術史 現代美術 表象文化論 もの派 李禹煥

## 1. 研究開始当初の背景

本研究は、1990年代後半から現在までの日本を中心としたアジア諸国の現代美術を、それにまつわる理論的言説と照らし合わせて検証するものであった。アジアを含む非欧米圏の現代美術の世界的興隆は、1990年代後半から2000年代初頭にかけて欧米で生まれた現代美術の理論的言説、すなわちリレーショナル・アートやコラボレティヴ・アートなどの非物質的表現方法を支持する言説ときわめて密に関連していた。本研究では、これら言説から抜け落ちていたオブジェクト指向の美術家、ならびに映像を主たる表現手段とする美術家の活動を中心に調査を進める予定であった。

## 2. 研究の目的

本研究は、1990年代後半から台頭してきたリレーショナル・アートならびにコラボレティヴ・アートとして括られてきた作品群から、2010年代に入って顕著になるオブジェクト指向の作品群への移行を考慮しつつ、2010年代以降の日本を中心としたアジアの現代美術を検証するものであった。1990年代後半からの日本とアジア諸国の現代美術の一つの傾向は、リレーショナル・アートならびにラボレティヴ・アートの形式であった。欧米の美術批評家がアジア諸国を中心的な考察の対象としていないにも関わらず、この地域の美術家は、しばしば彼らの批評理論の価値基準に従って肯定的に評価されてきたのである。本研究の目的は、地域に固有の美学的特徴に呼応する美術理論だけでなく、作品の形態を重視する現代美術に関わる理論的言説と照らし合わせて作品を検証することにあった。

## 3. 研究の方法

本研究は下記の二つの方法で遂行された。

1) 今日では、絵画や彫刻などの伝統的芸術ジャンルの峻別方法では捉えきれないほど、美術の表現手段は多様化している。インスタレーションの名のもとで包括される作品群、あるいは作家や観者を作品のひとつの媒体とするパフォーマンスやソーシャリー・エンゲイジド・アートと呼ばれる作品群など、これらの傾向を芸術ジャンルの区分に従って分類することは難しくなっている。このような状況を背景に、視覚芸術あるいは造形芸術という言葉が如実に物語るように、現代美術において従来の美術と親和性が低いものとして考えられ、これまで看過されがちであった文学という芸術ジャンルに着目した。この研究では、文学という展望から、映像を主たる表現媒体とする作品群とオブジェクト指向の作品群とを比較検討した。

2) 一方、アジアの現代美術においてリレーショナル・アートならびにコラボレティヴ・アートの形式を採用しない美術家たちも少なからず存在している。本研究では、絵画と彫刻を起点に作品制作を行うオブジェクト指向の代表的美術家である李禹煥に照準を定めた。1960年代末から1970年代初頭にかけて活動した美術家集団「もの派」およびのその中心的人物であった李の活動について調査を進めた。李の仕事の中でも、彫刻シリーズ 関係項 の1960年代後半から現在までの展開を考察する方法を採択した。

## 4. 研究成果

本研究は下記の二つの成果を出した。

1) 現代美術における文学の役割に照準を合わせ、映像を主たる表現手段とする日本の現代美術家の活動を中心に調査を進めた。ここで文学という言葉が指し示すのは、書物の形態をとる文学ではなく、構成要素として文学が内在している視覚芸術作品である。田村友一郎、ミヤギフトシ、小林エリカ、豊嶋康子、山城知佳子、北島敬三、以上の日本の美術家6名の作品を分析した。研究の成果は、『話しているのは誰？ 現代美術に潜む文学』展覧会カタログ(美術出版社、2019年)に掲載された論文に結実している。

2) 自然や人工の素材を節制の姿勢で組み合わせるスタイルを確立し、美術運動「もの派」を牽引した韓国の美術家、李禹煥について研究を行った。李は、70年代以降は線よりや点より、80年代以降は風と共にや照応など、静謐な画面の絵画シリーズを制作し続けている。一方、立体作品は1960年代後半から制作が開始された 関係項 のシリーズが今日まで継続されている。本研究では、とりわけ 関係項 の構想に着目し、その1960年代から2010年代

までの展開を考察した。研究の成果は、『李禹煥』展覧会カタログ（平凡社、2022年）に掲載された論文に結実している。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 Naoki Yoneda
2. 発表標題 Art in Japan and Asian countries in the Postcolonial Era
3. 学会等名 Platform Asia (招待講演)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 米田尚輝	4. 発行年 2019年
2. 出版社 美術出版社	5. 総ページ数 287
3. 書名 話しているのは誰? 現代美術に潜む文学	

1. 著者名 米田尚輝	4. 発行年 2022年
2. 出版社 平凡社	5. 総ページ数 304
3. 書名 李禹煥	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------